

はじめての訪問

―後藤敏雄先生を偲ぶ―

山田 稔

その年（一九四九）は京大の入試がおこなわれたのが六月で、七月ははじめ入学の翌日から夏休みがはじまった。大学に入ったという実感がまったくなかった。「奇妙な戦争」ということばがあるが、それにならって言えば「奇妙な入学」だった。学制改革のどさくさにまぎれてもぐりこんだため、後からあらためて入試を受けねばならなくなった。今からでは受験勉強は間に合わない、ああどうしよう。――後年、大学教師になってからもこんなコワイ夢をいくども見た。

さて九月なかば、やっと授業が始まって最初にできた友だちが中川久定だった。クラスはちがうがフランス語の授業はいっしょだった。その年は文法は合併授業で伊吹武彦先生が担当、ただしふだんの半分の時間で初級を終らなければならぬので伊吹さんは説明だけで、練習問題やチームなどは後藤さんに任せた。講読は渡辺明正さんだった。

中川と私は大学で毎日のように顔を合わせ、それでもまだ足りずに家を訪ね合った。嵐電の龍安寺道に近い彼の家と洛北の私の家とはかなり隔っているのだが、当時はその距離を遠いとは感じ

なかった。

会って喋ることはいくらでもあった。文学の話だけでなく、新しい友人や先生たちのうわさもした。そのうち先生の家を歴訪しようということになった。

最初の白羽の矢が立ったのは後藤さんだった。いちばん若かったからだと思う。いま数えてみると当時の後藤さんは三十三、四のはずだが、「書生」といった雰囲気はまだどこかに残っていて、飾り気がなく好感がもてた。あのひとなら気軽に学生の相手になつてくれそうだ。まだ独身のようだし、下宿に遊びに行ったら酒でも飲ましてくれるかもしれない。そんな虫のいいことまで期待していたような気がする。

住所を調べてきたのはたしか中川だった。当時、後藤さんは清水坂あたりに住んでいた。ある日の午後、私たちは先方の都合もたしかめず、好奇と期待に胸をふくらませて歴訪の第一歩をふみ出したのである。曇った、うすら寒い日だった。一回生のおわりごろ、二月末か三月はじめ、すでに春休みに入ってからのことだったかもしれない。

後藤さんはある家の二階を借りて暮らしていた。母屋のひとに案内を乞うと、間もなく玄関に姿を現わしたのは若い女性だった。あれ、このひとは……。そう、奥さんだったのである。予想に反し後藤さんは結婚していたのだ。新婚はやほやのころだったらしい。

私たちは戸惑いながら、先生にフランス語を習っている京大生で、と名を告げた。ところが風邪で寝ているという。それでは、と早々と退散しかかるのを引きとめて奥さんは二階へ消えた。私たちは顔を見合わせてためいきをついた。

やがてふたたび姿を現わした奥さんの「かまいませんから、どうぞ」の言葉に甘えて私たちは二階へ上った。いかにも新婚家庭らしくきれいに片づけられた、そしてどこやらはなやぎの感じられる座敷に布団を敷いて後藤さんは寝ていた。熱でもあったのではないか。そのかたわらに恐縮して正座していた私たちの黒い詰襟の制服姿が目につく。

あのころの私たちをつき動かしていた人恋しさは何だったのだろうか。胃袋の飢えていた私たちは、人のこのころにも飢えていたのだ。

偶然、見舞いの形になったこの不意の来客を、病床の後藤さんはいくぶん物珍しげにながめていた。しかしそのことばには初対面にもかかわらず友情のようなものがにじみ出ている。いそいそと茶菓でもてなす奥さんの物腰と明るい声には、夫の弟を迎えるような慈しみが感じられた。それが飢えている私のところに滲み

た。

去る四月二十六日のお通夜の席でおよそ四十年ぶりにお目にかかった奥さんは、すぐに私に気づかれて「むかしはよく家に来てくださいましたわね。シベリア時代の話などして」と懐しげに頬笑まれたが、その表情は一瞬、喪を忘れてなごみ、心なしか若やぐかに見えた。おそらくそのとき、新婚早々の不自由な、しかし幸せにみちた間借り生活のことを、そこに不意に訪れて来たまだ少年の面影をやどす二人の学生の顔とともについ昨日のこのように思い浮かべられたのではないか。

後藤さんの家へは、その後、下鴨の夢倉町へ移られてから何度遊びに行った。三回生のときの元日だったか、中川と年始の挨拶にうかがい、下戸の主人をさしおいて奥さんのお酌でご馳走になったこともある。しかしなかでも、あの最初の訪問のときのこととが忘れられない。それは私の貧しかった青春の思い出の片隅に小さな、しかしあたたかい灯をともしつつづけている。――先生、ありがとうございました。

(一九九二年五月一七日)